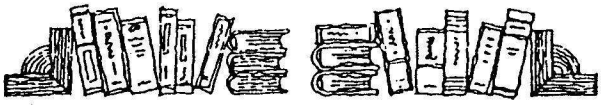
日本女子大学

国語国文学会だより



No. 11　　1994. 8

国文学科卒業生の会

国語国文学会 春の総会・研究発表報告

平成六年度春の総会・研究発表会が、五月二十六日(木)、香雪館二〇二番教室において開催されました。

◆開会の辞

国語国文学会会長　阿蘇　瑞枝　先生

◆第一部　総会

(1)奨学金授与

久松潜一賞　学部四年次　橋本志眞子

上村悦子賞　博士前期二年次　田辺　玲子

(2)国語国文学会委員長挨拶および役員紹介

(在学生の会・卒業生の会)

(3)平成五年度活動報告・会計・監査報告

(4)平成六年度活動計画・予算案

(3)(4)については在学生、卒業生よりそれぞれ報告・説明があり、各案件とも審議、承認されました。なお今年度の活動計画としては、談話会(宮尾登美子氏の作品を読む)、文学散歩を企画しております。

(5)自主ゼミ紹介・報告

◆第二部　研究発表会

(1)源氏物語の「論」

大学院博士課程前期在学生　稲員　直子

(2)『濠虚集』

「カーライル博物館」における留学体験の位相

大学院博士課程後期在学生　五十嵐　礼子

(3)新聞コラムの文章構造の研究

「天声人語」の段落と英訳パラグラフの比較

大学院博士課程前期在学生　佐野　江美

いずれも熱意溢れる発表であり、活発な質疑応答が行なわれました。

秋季大会・公開講演会のご案内

日　時・平成六年十一月二十六日(土)　一時～

講演者　作家　**宮尾登美子氏**

――『蔵』『クレオパトラ』にみる女性の生き方と私(仮題)――

本学教授　**麻原美子氏**

――舞の本と法華経――

(以上　予定)

＊研究発表会　　午前十時～十二時

◆研究発表者募集◆

発表ご希望の方は、左記によりご応募ください。(発表時間三十分、質疑十分)

応募資格　本学国語国文学会会員

応募方法　四百字以内に発表要旨をまとめ論題とともに申し込む

応　募　先　国文学科研究室内・「国語国文学会秋季大会研究発表者応募係」宛

締め切り　九月二十六日(月)

選考方法　国語国文学会において選考、結果は後日、連絡します。

詳細は次号

日本女子大学国語国文学会 会計報告

（平成五年度卒業生の会　決算報告 1994. 4. 30 現在）

【収入の部】

前年度繰越金	950,222
会費	679,200
利子	24,063
図書販売	135,080
計	1,788,565

【支出の部】

通信費	163,231
文具代	7,943
コピー代	11,645
会報印刷費	145,955
委員会活動費	49,684
ゼミ費	50,000
講演会費（講師御礼）	62,500
（機器、会館使用料）	45,050
新会員PR費	18,445
発会準備金返済費（4回目）	100,000
図書購入費	177,925
計	832,378
繰越金	956,187

上記の通り決算報告致します。

会計　安東佳代　山本玲　保志美也子

監査の結果、上記決算報告が正確であることを認めます。

監査　荻窪昭子　倉田宏

（平成六年度卒業生の会　予算案）

【収入の部】

前年度繰越金	956,187
会費	500,000
計	1,456,187

【支出の部】

通信費	200,000
文具代	30,000
コピー代	30,000
名簿印刷費	250,000
名簿発送費	150,000
会報印刷費	150,000
委員会活動費（運営委員会費）	30,000
（委員会費）	10,000
（交通費）	40,000
ゼミ費	60,000
講演会費	50,000
大会諸経費	50,000
新会員ＰＲ費	20,000
発会準備金返済費	100,000
慶弔費	10,000
予備費	276,187
計	1,456,187

平成六年度 研究サークル

○平安文学談話会
金曜日　午後五時半または土曜午後二時（年四回）
国文学科研究室
平安文学に関する研究発表後、談話会
・連絡先　高野晴代　電話　〇三（三三七〇）六八〇六

○皇女研究会
毎月第二土曜日　午前十時半
大学図書館共同研究室
皇女総覧平安朝篇の作成
・連絡先　柳澤理恵子　電話　〇四五（八四一）六五二五　楠木方

○古代中世文化論
毎月第四月曜日　午後一時半
国文学科資料室四二六
中世の芸術論
・連絡先　山田佐和子　電話　〇三（三九七二）四八四三

○中島斌雄先生の俳句を読みながら
毎月第三土曜日　午後二時
中島斌雄先生宅
中島斌雄全句集
・連絡先　綾野道江　電話　〇四四（九六六）五四二五

○卒業生の文学活動の跡をたどる―国文学科卒業生を中心に―
土曜日　午後二時（年四回）
国文学科資料室四二六
『青踏』創刊頃の編集者について
・連絡先　斎藤令子　電話　〇三（三七八一）六三八〇

参加ご希望の方は、各サークル代表者に随時お申し込み下さい。

国語国文学会だより No.11

平成五年　秋季大会
研究発表・公開講演会　報告

平成五年十一月二十七日(土)、国語国文学会秋季大会 午前の部〔研究発表会〕を桜楓会二号館三〇七号室、午後の部〔議事・公開講演会〕を八十年館八五一教室において、開催しました。

研究発表を午前中に開催したのは初めてのことでしたが、発表時間も十分となって充実した会となりました。

午後、活動報告に続いての講演では、本学教授石綿敏雄氏がこれもまた初めてOA機器を導入して、講演をなさいました。先生の操作されるパソコンの画面が、プロジェクターを通して正面の大型スクリーンに映し出され、新しい学問の方向の一つを驚きとともに知りました。次に、本学客員教授ドナルド・キーン氏からは、氏の日本文学への深い造詣をその思いとともにうかがい、感銘を受けました。

そうしたなかで、キーン先生を名誉会員に推挙したいとの提案が前学長青木生子先生を中心に起こり、満場一致、先生を私どもの学会にお迎えすることを決定しました。

午前中から行われた大会も盛況のうちに終了、引き続き生協食堂でキーン先生を迎え、先生方、学生、卒業生が大勢参加、和やかに懇親会を開きました。(総務)

研究発表要旨

＊当日発表の順に掲載させていただきます。

錯綜する〈母〉・不在の〈父〉
―『三四郎』ノート―

本学大学院博士課程　藤木直実

『三四郎』にはさまざまな〈母〉が登場する。彼女たちは、年齢も境遇も多様だが、作品世界におけるその役割には、看過できないものがあるだろう。その一方で、〈父〉は、その不在が語られるのみである。この奇妙な対照から次のような仮説を導くことができる。すなわち、三四郎は、母からの自立をいまだ成しえず、また、父の存在の何たるかを知らないのではなかったか。

母の存在は三四郎にとって、故郷や〈家〉との紐帯であり、その選民意識の原動力である。また、母から自立できないことは、他者としての女を理解できないことにもつながるだろう。さらに、父の不在は、従来の家長がその力を失ったものの、新しい時代の規範たる〈父〉が確立されないことを意味する。「森有礼の葬儀」はそれを象徴的に示す。美禰子と三四郎の関係が結婚へと帰着しなかった要因のひとつとして、この「錯綜する〈母〉と不在の〈父〉」の意味を検証したい。

三島由紀夫『橋づくし』における伝統と近代

本学大学院博士課程修了　中野裕子

四人の花柳界の女性が七つの橋を無言で渡るという『橋づくし』は、そのエピグラムに示される近松の『天の網島―名残の橋づくし』に描かれた此岸と彼岸、道行の発想など、戯曲的、構成的で型を重視した伝統的精神にもとづいて書かれている。しかし三島は伝統そのものを書こうとしたのではなく、伝統によって近代へのパロディーを書こうとしたのである。それは「戯曲の法則を強引に小説の法則へ導入しよう」(「戯曲の誘惑」)とした近代小説への方法的批判であり、その文学的姿勢は、みなを除く三人に描かれた精神性に対し、精神性を持ち合わせず肉体のみの描かれたみなが到達した、彼岸の位置に通ずる。

三島の文学的理想が彼岸として描かれ、しかもそれが〈橋づくし〉というゲーム内のことで、ゲームの外の現実に何ら影響を及ぼさないという辛口の結末が設定されている所に、割り切れすぎるこの短篇に、一点の混沌とした近代小説らしさが加味されている。

『水鏡』の伝本とその増補記事をめぐって

本学大学院博士課程修了　多田圭子

『水鏡』の成立・作者・諸本系統等に関する基礎的研究は、昭和三十年代までに平田俊春・益田宗氏らによってなされたが、以後『扶桑略記』の抄録として、その文学性の欠如のみが指摘されるに過ぎず、研究は停滞状態にあった。しかし最近、小峰和明氏は、序の説く四劫思想に下降史観とは一線を画した醒めた歴史認識が窺える点を重視され、伝本研究、及び関連資料との比較検討を通した作品固有の意義付けの必要性を説かれた。

諸伝本中、古態を示す流布本に対して、後出増補本（異本）を代表する前田家本については、従来の諸論で唯一その独自記事が検討され、鎌倉中末期成立説が導きだされている。そこで、今度はその独自記事と関連資料との照合を通して先行研究を再検討し、また新たに独自記事の幾つかの問題点を、永和元年、南都元興寺及び大和磯下郡法貴寺において書写した旨を記す僧信乗の奥書に注目しながら検討し、前田家本の成立と受容を探る一助としたい。

『仁徳記』イハノヒメ伝承における丸迩臣口子

本学大学院博士課程修了
共栄学園短期大学助教授　壬生幸子

古事記が一定の用字意識をもって記述されていることは、先行の諸研究により解明されてきている。用字法の考察によって筆録者の表現意図を明らかにする試みの一端として、古事記において、使者を派遣する意の動詞に用いられる「使」「遣」字のつかいわけの意識を手がかりとして考えてみたい。

仁徳記には、仁徳天皇の皇后イハノヒメの出奔に際して、舎人鳥山と丸迩臣口子の二人の使者が派遣されたことが記される。この鳥山と口子を派遣する意の動詞には、それぞれ「使」「遣」字が用いられている。鳥山はいわば先駆的な使者であり、正式の使者が口子であることは文脈から明らかであるが、古事記の「使」「遣」字のつかいわけの意識はこのことを裏づけると考えられる。「遣」字を用いて表現される使者の任務を用例に即して明らかにしながら、口子派遣の意図について考察を加えたい。

講演

＊午後行われた公開講演会の要旨を、発表の順に掲載させていただきます。

ことばとコンピューター

本学教授　石綿敏雄

（講演は、先生が実際にコンピューターを操作され、その画面をプロジェクターによってスクリーンに映しだして行われました。）

今やコンピューターは、私達の身近な生活の中に、深くかかわってきている。

ことばとコンピューターとの関係を示す例としては、スーパーマーケットでもらうレシートにある「またのご来店をお待ちしております」や、電気・ガスの支払い金額の文字等、生活の中で頻繁に目にするものばかりである。

①ことばの教育とコンピューター

教育の現場でもコンピューターが使われてきている。小学生の漢字の学習にコンピューターを導入したプログラムは、小学生が身のまわり

で目にする漢字を筆順を含めて教えていくもので、コンピューターを教育の場すべてで使うのではなく、教育の道具の一つとして使えば、非常に有効であるということがいえる。

また、小学校で学ぶ「方言と共通語」の復習としてコンピューターを使う例として、茨城県の方言を教えるプログラムがある。各方言にヒントを加え、共通語を答えさせるもので、方言の語源も解説してあり、方言と共通語について楽しく学習できる。

国語教育だけではなく、日本語教育の分野でも、外国人がまちがえやすい日本語の用法をコンピューターで学習するプログラム（連用形、「～前に」「～あとで」の用法）もある。

これらのプログラムは、大学生にワープロの仕組みを考えさせるために作成させたプログラムを、さらに他の方面に応用したものであった。

②コンピューターを使った言葉の研究（文学の研究）

どういうことばがどの作品にあるかを探す、つまりことばの検索を行うことができる。例えば、コンピューターが『伊豆の踊り子』を読み、「踊り子」ということばを探すように命令すると、画面に「踊り子」が使われている箇所が出てくる。

コンピューターの検索機能は、文学研究にも役立つ。詩人や歌人が使う色の名前をさがし、作品の内容を考える研究者もいる。

③文法の実験的研究

まず、機械翻訳が挙げられる。

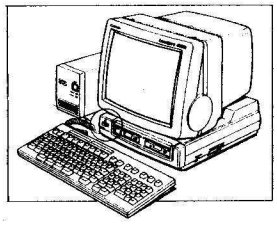
また、学校教育の例では、『奥の細道』で助詞「かな」がどの俳句に使われているかを調べ、類義のことばをコンピューターによって探すことができる。

コンピューターは、教育や研究の多方面で有効に利用できる。最近は、ワープロは勿論、コンピューターで使える数々のプログラムが市販されている。これに親しんでいけば、楽しく使っていける。

文学部出身者でも、コンピューター関係の分野で活躍することができる。最近は、その分野に就職する人もめずらしくない。

コンピューター＝難しい　という公式をあてはめてしまいがちであるが、コンピューターの面白さを感じていただければ、幸いである。

（一瞬に変化する画面。一画ずつ書き順どおりに構成されてゆく漢字、色鮮やかに花開いてゆくチューリップ……展開する画面の見事さをお伝えできないのが残念です。）



日本文学はなぜ面白いか

本学客員教授　ドナルド・キーン

私が日本文学を研究するようになったのは、全く偶然の機会からでした。反戦主義者、むしろ反日家だった私が、その後の長い年月を日本文学研究に打ち込んできたのは、日本文学が面白いからの一語につきます。

『源氏物語』には、悪い人、敵役がいません。日常性とは遠い美の世界を描いています。『徒然草』、西鶴の作品にも登場人物との間に距離があって面白いですね。近松も好きな作家です。悲劇の原因がお金ということも、時代を感じさせられます。

芭蕉の『奥の細道』は、六十回は読んだでしょうか。芭蕉は天才です。その他徳川時代では、好きなのは蕪村です。

明治の文学では、正岡子規、石川啄木など、歌人が日記を残していますが、この日記がいい。これは日本文学の特徴の一つといってもよいでしょう。有島武郎の『或る女』、永井荷風の『あめりか物語』『すみだ川』、現代文学では谷崎潤一郎、太宰治、三島由紀夫、安部公房が好きです。

日本文学はむずかしいと言われます。例えば謡曲『松風』の最後のところ、「松風ばかりや残

るらん、松風ばかりや残るらん」、この飛躍が分からないと多くの外国人研究者はいいます。しかし、この余韻、何ともいえない余韻、情趣が日本文学の美であり、面白さなのです。
　文学は、国にとっても無視できない大切な財産です。私は、日本文学が大好きです。それに一生を捧げたことを幸せに思っています。

（文責・総務）

＊ドナルド・キーン先生は、残念ながら平成五年度かぎりで本学をお去りになりました。懇親会では、国語国文学会より感謝の思いをこめ、花束を贈呈、別れを惜しみました。
　司会者との間で、狂言の一節のやりとりもご披露くださり、感慨深いひとときでした。

◆ドナルド・キーン先生の著書紹介

・『古典を楽しむ』　九六〇円
・『声の残り―私の文壇交遊録―』　一、三五〇円
・『日本語の美』　一、四〇〇円
・『日本人の美意識』　一、四五〇円

　当日、会場で頒布した先生の著書をおわけします。代金は送料込み。ご希望の方は、郵便局より同封の振替にてお申し込み、ご送金ください。
　今年度会費もご一緒に!!
『国文目白』33号（目次下段）もよろしく。

青木生子名誉教授学長退任記念号　目次
（国文目白　三十三号）　発表順

青木生子名誉教授略歴ならびに著述目録
私の研究遍歴―随想風に―……青木　生子
日本女子大学と私……青木　生子
―学長（理事長）就任期間の略年譜―
『万葉目安』と『万葉集目安補正』……浅野　三平
用言に冠する枕詞を考える……阿蘇　瑞枝
―記紀・風土記を中心に―
秘められたメッセージ……後藤　祥子
―『蜻蛉日記』の消息の折り枝―
将軍源実朝と和歌をめぐる試論……麻原　美子
古事記の「女人」……壬生　幸子
―用字意識の一考察
コノハナノサクヤビメ試論……福島千賀子
―桜の聖性をめぐって―
古事記「稽首」の訓みについて……寺田　恵子
『扶桑略記』皇極朝の天変異事……辻　英子
萬葉集を彩る色と織り……安藤　武子
黒人のフネの歌……細川　純子
憂愁の詩人旅人……岩野　圭子
―讃酒歌からの考察―その二・制作動機について
背子のいる景……浅野　則子
―坂上郎女一四三二・三番歌を考える―
古挽歌一首……平舘　英子
「父母に申し別れて」……成島　知子
―大伴家持・追同処女墓歌をめぐって―
文芸における山の空間認識……森　明子
歌題の生成と屏風歌……高野　晴代
―貫之「延喜六年内裏月次屏風歌」を中心に―
今昔物語集巻二十二第八話
及び世継物語第五十六話の生成……白石　美鈴
人麻呂の枕詞試論……八木　京子
―その創作意識を探る―
皇女総覧（一）……皇女研究会
平家物語……斎藤　直子
その死の諸相
『太平記』の死の諸相……崔　文正
―北条軍団の滅亡をめぐって―
『雨月物語』執着の結末……岩井　静香
―宮木と磯良―
『三四郎』試論……小長井晃子
―意識の深層―
「三四郎」試論……藤木　直実
―美禰子のために―
『花園の思想』試論……武下　智子
―視点の彷徨―
「沈黙」論へのノート……渡部さち子
―主題をめぐるいくつかのメタファー―
松谷みよ子《直樹とゆう子の物語》……三根　朋子
―〈告発児童文学〉完成への軌跡―
日中対照研究……中島　悦子
―使役・「てもらう」・「よう（に）」構文と“譲”構文―
女子学生の日常談話の応答表現……藤川　典子
―「ウン」の用法を中心に
日本語、中国語における完了表現……李　琦娜
―主に『た』と『了』について
【書評】
『青木生子博士頌寿記念論文集 上代文学の諸相』……粂川　光樹
青木生子著『目白の丘 生田の森
―二十一世紀の女子教育へ―』……倉田　宏子
『井上百合子先生記念論集 近代の文学』……金子　幸代
【紹介】
上村悦子著『蜻蛉日記解釈大成 第7巻』……後藤　祥子
久保田淳著『中世和歌史の研究』……麻原　美子
木藤才蔵著『連歌史論考』上・下（増補改訂版）……麻原　美子
【彙報】
青木生子先生に感謝する会の記

※申し込み　〒112　東京都文京区目白台二―八―一
（葉書にて）　日本女子大学国文学科研究室『国文目白』係宛
※冊子代金は、冊子到着後に払い込んでください。送料別一冊二千円です。

一九九四年八月三十一日発行・日本女子大学国語国文学会卒業生の会

会員の紹介

下玉利　百合子氏（41回生）
本学　論文博士第一号に

平成五年十二月十六日、下玉利百合子氏は日本女子大学から「枕草子論――史的周辺よりの考察――」により、論文博士第一号の称を受けられました。氏の枕草子への深い思い入れ、文学論にとどまらず歴史的な背景を踏まえての独創的な考察は、高い評価を受けておられますが、今回の論文提出にあたっては、国文科あげての応援も相まっての快挙となりました。

下玉利百合子氏は、昭和十六年日本女子大学校国文科入学。十九年九月繰り上げ卒業、すぐ郷里の長野県立岡谷高等女学校に勤務、以来三十数年を東京都立武蔵丘高等学校などで国語教育にかかわってこられました。

この間、昭和二十三年には「三十六番教室」で読売演劇文化賞を受賞、劇作家としての才能も認められ、ことに作家長谷川伸には、弟子入りを懇望されたほど。著書にみる構成力の見事さは、そこにもうかがうことができそうです。

昭和五十二年『枕草子幻想　定子皇后』、六十一年には『枕草子周辺論』を発表、今回の論文作成への道を歩み続けられました。

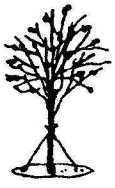
氏は、「私には二人の師匠がいる」といわれます。一人は、学者であったお父様。幼い頃から日本の古典文学の手ほどきを受けつつ、広く世界の文学を読むことも勧められた由。そしてもう一人が、昭和二十八年に結婚された歴史学者のご主人。古記録を読むこと、書いた人の心を読むことを教えられてきた――と。

また、今日の氏を育てた温床は母校であり、入学当時日本女子大学校は選択が自由で、茅野蕭々先生のドイツ文学をはじめ、論理学、哲学などを選択。学科では武島羽衣先生の古今集、久松潜一先生の文学史、そして橋本進吉先生の国語学に鮮烈な衝撃を受けつつ、戦時下の学生らしく卒業論文は古事記に。しかし、その時の学習が思えば広い視点を与えられた第一歩だったとおっしゃいます。

十九歳で教員になったとき、勤労動員で勉強もできない生徒が可哀相で、配属将校に頼み込み、万葉集の講義をしたことも忘れられない思い出。教員生活での生徒との授業中の交流が、楽しかったし、血とも肉ともなっていると、長野県でも東京都でも、教授法で国語教師の№1と評価された氏は、謙虚に語られます。

女学校二年生の時の枕草子の講義が面白くて忘れられず、いつか多くの体験や多くの方々の学恩がそこに一つに流れよって、今日に至ったこと。枕草子はもっと高く評価されてよい作品、今回のことも枕草子を評価していただくための有難い一歩と考え、皆様のご厚意、学恩に応えるために一層がんばっていきたい。

文学を歴史の流れの中で見つめ、逆に歴史を文学の面からも捉える、広い視座を失うことないように心がけながら――と若々しく、情熱的に話してくださいました。（文責・総務　斎藤）



◆文学散歩へのお誘い　10月29日◆

――鷗外文学のあとを訪ねて――

森鷗外が明治25年から大正11年の30年間、60歳で没するまで居住した旧観潮楼跡（現・文京区立鷗外記念本郷図書館）において遺品や資料を見ながら生涯を概観。

その後、小説『青年』の主人公小泉純一が歩いた根津神社、『雁』のヒロインお玉の住む〈格子戸の家〉があったと設定されている無縁坂、『舞姫』『うたかたの記』などが執筆され、当時のまま一部が残っている花園町の家（現・水月ホテル鷗外荘）を訪れる予定です。鷗外研究家新妻佳珠子氏（新3）がご案内くださいます。

・日　　時　10月29日(土)午前10時30分～
・集合場所　文京区立鷗外記念本郷図書館
　（地下鉄千代田線千駄木駅下車徒歩5分）
・所要時間　約四時間
・費　　用　昼食代約千円（舞姫弁当）
・連 絡 先　企画係・佐田公子
　（0484・73・5456）
・申し込み　10月18日～10月25日
　佐田まで、夜間にお電話を

研究室だより

○新年度がはじまって、早くも四ヶ月経過しようとしています。

○本年度の国文学科の専任の先生方は、昨年と変りありません。

後藤祥子先生（中古文学）
麻原美子先生（中世文学）
浅野三平先生（近世文学）
熊坂敦子先生（近代文学）
倉田宏子先生（近代文学）
源　五郎先生（近代文学）
石綿敏雄先生（日本語学）
佐久間まゆみ先生（日本語学）
清水康行先生（日本語学）
谷中信一先生（中国思想史）
阿蘇瑞枝（上代文学）の十一名です。研究室の運営や学生のお世話をして下さっている助手さんは昨年同様、白石美鈴さん、桂千佳子さん、植田恭代さんの三名です。

○非常勤の助手さんは、田中愛さんです。

○国語国文学会の担当は、倉田先生、谷中先生です。

（阿蘇記）

活動によせて

（大会出欠席のはがきより）

●講師プロフィール、会員の著書紹介、ありがたく拝見しました。今回の講演会の要旨、ぜひご紹介を。（広島・旧31　宮庄　ミツヨ）

●会の若い方たちが、どういう勉強をしておいでかと思い、入会。折々のおたよりを楽しみにしています。（明石・旧36　太田　と志）

●初めて自主ゼミに参加させていただきましたが、責任者の方のご親切、ご努力に感謝しています。（東京・旧40　箕浦　純子）

●頭にも心にもよい刺激で、いつも有難く参加しています。（千葉・旧41　石川百合子）

●春の大会に上京出席。在学生と卒業生の一体化は大変結構なこと。なるべく会に参加したいと思います。（京都・旧44　相見とし子）

●秋季大会の講演はいつも魅力のある講師で、大変よいと存じます。今回もぜひと思っていますが、仕事（手話通訳）の関係でどうなりますか。（稲城・新3　田中のり子）

●秋の静かな季節に文学を通して人生への思いを深め、同時に旧友と母校で語り合え、若返りにもなります。（富田林・新4　天野　教子）

●国文科以外の卒業生（各方面で活躍中の）の文学的見地からの講演なども面白いのでは。また、会費を少し値上げして、さらに活動を充実されては如何。（東京・新5　地主　寿子）

●ご努力のお蔭で予備費が増加。今後5年間くらいの中期活動計画を立てられ、更なる基金を求められては。税金免除の寄付の制度はないのでしょうか。（熊本・新16　出田　節子）

●毎回講演者は幅広く活躍中の方で内容も濃く、しかも分かりやすいお話で楽しみです。

秋季大会に向けて

宮尾登美子著『蔵』を読む会

＊10月20日(木) 午後1時30分～
＊国文学科資料室四二六（図書館4階）
＊連絡先　斉藤合子　03・三七八一・六三八〇

ご一緒に、読書の秋を!!

（相模原・新24　渡辺真知子）

●国語国文学会だよりを拝見し、学窓より遠くある現在、啓発される思いです。同窓の方々はどうしておいでか、学生時代を懐かしく思い返しています。（松戸・新27　横田　妙子）

●パソコン教室の指導をしています。先日も古文書の品詞の分析を希望の方がいました。皆様の中でもご希望でしたら、どうぞご一報を。（東京・新36　中島美奈子）

お知らせ

●振替用紙を同封いたしました。会費の納入をよろしくお願い申し上げます。

●会員名簿、次号（10月末発送）に同封いたします。ご了承くださいますよう。なお、ご住所変更の方、大至急ご連絡ください。

一九九四年八月三十一日
発行・日本女子大学
国語国文学会卒業生の会